

東洋のハリウッドから映画の町へ

樋口須賀子

戦後の映画はじめ

一九四六（昭和二十一年）四月、中国大陸から父母と祖父は、五歳の兄、三歳の私と赤ん坊の弟を連れて、全員無事に引き揚げる事ができた。小阪の家が空襲に遭わずに残っていたので、そのまま生活出来たのは幸運だった。今里にあったセルロイド工場が焼失したため、父と祖父は知り合いの加工業者から仕入れた商品を売り歩いて、生活の立て直しを図っていた。空襲で焼失したグリコ本社が焼け跡から復興して事業再開、江崎社長から会社に復帰するように勧められた父が、おまけの業者として協力することを約束して、再び、小さなおもちゃ作りに専念し始めた頃、下の弟が生まれた。

河内小阪の駅前広場に大きなスクリーンが出現、大勢の老若男女、子ども達が集まっていた。商店街の夏祭りだったのか、金魚すくいや屋台が並んでいた記憶がある。上映されたのは『リンゴ園の少女』。戦後、天才少女歌手として大人気だった美空ひばり主演の映画、ラジオ番組で人気があったドラマの映画化だった。一九五二（昭和二十七年）年十一月公開の『リンゴ園の少女』を駅前広場で観たのは、私が十歳の頃。大ヒットした並木路子の『リンゴの唄』とひばりの『リンゴ追分』に歌われる赤いりんごと白い花びらは、敗戦から

立ち直る人々の心に明るい希望を与えた。子どもも大人も、歌に映画に夢中になっていた。

最初の野外上映イベントが大阪毎日新聞主催で、浜寺海水浴場において開催されたのは、一九一〇年のことらしい。野外での映画上映は、映画館のない農村や町でも開かれていた。

私達が通う小学校の校庭で、夏休みだったか、盆踊りの後で観た映画は、『二十四の瞳』だったように思う。坪井栄原作、木下恵介監督、高峰秀子主演の小豆島を舞台にした女性教師と十二人の生徒たちの物語。平和な島での暮らしが戦争によって、それぞれが苦難の道歩み、先生も生徒も悲劇に巻き込まれていく。一九五四（昭和二十九）年に公開されたこの映画は大ヒットした。主人公の大石先生が、事故死した幼い娘を抱きかかえて走る場面で、隣で観ていた母が大声をあげて泣いていたのが、私の脳裏に深く残っている。その一年前にトラックにはねられ、二番目の弟が亡くなった。母は、大石先生と自分を重ねていたのだろう。未っ子でやんちゃな弟をわずか三歳で亡くした父母の悲しみはどんなだったか。

父と映画（帝キネ）

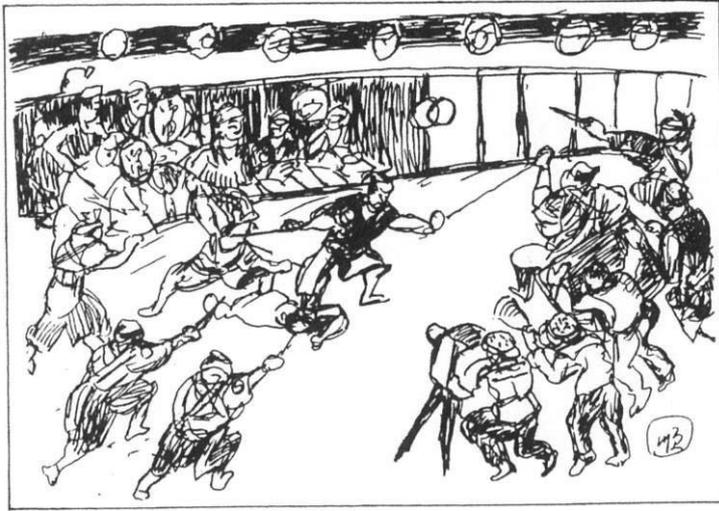
父・宮本順三がグリコに入社した一九三五（昭和十）年は、大正時代の時代、活動写真はキネマからトーキー

の時代を経て、「映画」と呼ばれるようになった。一九二三（大正十二）年の関東大震災後、大阪市は人口二一万人、日本一の都市となる。千日前、道頓堀、新世界へ、大阪市内にあった映画館の数は、一九三〇（昭和五）年には九十一館となる。学生時代の日記には、心ブラして映画館に行く様子が描かれている。

父が小学校四年生の時、大阪市内から布施町（現東大阪市）菱屋西へ引っ越した頃、帝国キネマ小阪撮影所があった。チャンバラごっこに夢中になった少年時代、活動写真の英雄は目玉の松ちゃんこと尾上松之助、そのあとを継いでモモちゃんこと市川百々之助が少年達のあこがれとなった。その百々之助の撮影風景を間近に見ることが出来て、活動写真の面白さにはまってしまう。自宅の隣人が女優の初代大江美智子（女剣劇）だった。宝塚歌劇団にいた大江美智子を映画に引き抜いた市川右太衛門（代表作『旗本退屈男』、北大路欣也の父）も小阪に住んでいたこと、川向かいの土堀に囲まれた延命寺や、当時、長瀬川沿いにあった松並木で映画撮影した後、休憩所として自宅に女優さんが



【番三式劇】 劇歌女少塚寶 雙番三
子智美江大



時代劇の撮影風景
(宮本順三画)



小阪撮影所ロケ風景と見学者
(宮本順三画)

来ていたことなど、日常生活に映画の世界が大きく占めていた。お礼にもらった入場券で両親や友人と映画館(小阪座)へ。映画好きの原点は、河内小阪にあった。現代劇の帝キネ芦屋撮影所(『籠の鳥』が大ヒット)に対して、時代劇中心の小阪撮影所が閉鎖された後、長瀬に敷地面積約一万坪の撮影所が誕生した。かまぼこ型のステージなど近代的な設備で、「東洋のハリウッド」と呼ばれた。

一九三〇(昭和五)年、中学時代の日記には、撮影風景を見物する人たちや俳優の姿が描かれている。トッキー初期の作品『何が彼女をそうさせたか』がキネ

マ旬報第一位に選ばれたのもこの年である。そして、建設後わずか三年にして、巨大な撮影所は一瞬にして焼失してしまう。(以下、日記より)

九月三十日 午前三時頃、外が騒がしいので家中起きる。外に出ると西南にあたって大きな火柱が赤々と天に立っているように思われた。人々が 大勢見に走った。父が見に行かれた。長瀬の帝キネ撮影所の火事で、あの広大なかまぼこ型の二つのステージが形もなくなっていた。町内のポンプがごろごろ走るよりも先に大阪の消防隊がポンプの自動車で行って来

た。大部分焼失して、門脇の二棟ほどを残しただけ。朝には号外が出た。

その後、撮影所は京都太秦に移ったが、一部の人が「アシヤ映画」の名で瓢箪山に独立プロを創り、映画製作を続けた。広大な撮影所の跡地には、樟蔭女子大の実習の場として、登録無形文化財「樟徳館」が建っている。長瀬川に架かる橋に「帝キネ橋」の銘が残っているのが唯一、撮影所の名残である。

今、全国から豆玩舎へ訪れる修学旅行生に、「東大阪に『東洋のハリウッド』と言われた大きな撮影所があったけれど、焼失して京都太秦に移って、今は映画村があったかも知れない」と話すとみんなびつくりする。修学旅行の見学先に太秦映画村が選ばれていることも多いという。

グリコ入社した頃から敗戦の年まで、映画界にとつては、「暗い時代」が続く。一九三六(昭和十一年)年、青年将校による二・二六事件、翌年、盧溝橋事件を機に日中戦争が始まる。二年後には「国家総動員法」が発令され、一九四一(昭和十六)年のハワイ真珠湾攻撃により、太平洋戦争(第二次世界大戦)へと日本は戦争の泥沼にはまってしまう。映画界では、フィルムの使用が制限され、国策の映画会社による戦意高揚のニュース映画などが上映される。スクリーン横に日章旗、上映前には、皇居に向かって拝礼することが義務付けられたという。

一九三九(昭和十四)年から、国内では材料不足のため、父はオマケの材料を求めて、奉天・天津グリコ工場に再三出張することになる。三年後には、オマケなしの白い箱グリコとなり、広告課も解散。やがて、物資不足で原料の砂糖や小麦粉の入手が困難になった会社は、航空機工業に方向転換、「江崎航空機材」と社

する会社になった。天津工場事業課次長として単身赴任していた父は、上海工場新設の計画に関わっていたが、計画の実現が不可能と知って、辞職願を本社に送っていた。奉天工場は、日満合弁会社として満州製菓に変わった。天津工場を出て独立したのは、旧ドイツ租界にあったドイツ人が建てた三階建てのビルを食堂経営していた木村氏から買い受けて、レストランを経営するためであった。天津の南端にあるドイツ租界から北へ、英国租界とフランス租界と日本租界を通して、天津の旧市内に出る。中でも一番の繁華街、フランス租界にはショッピングセンターや歓楽街が集中していたという。メイストリートのビクトリアロードを抜けると英国風の公園があった。

一九四四（昭和十九）年九月、一歳と九か月の私と四歳の兄を連れて、母は父の元へ。下関から船で釜山へ、京城（現ソウル）から鴨緑江を越えて山海関と天津までの長旅、制空権も制海権も失ったところ、ライフジャケットを着ての船旅、長い列車の旅、どんなに大変だったか？後から一人で渡って来た祖父と暮らしたつかの間の平和な時間。四月に父が現地召集されて、敗戦後、家族の元に帰って来るまでの長く苦しい時間。翌年四月に、アメリカのタンカー（上陸艇）に乗って長崎県佐世保港に無事引き揚げる事が出来たことなど、三歳の私の記憶には、何一つ残っていない。

天津と北京を再訪

一九九四（平成六）年夏、両親と兄弟妹の家族で、天津から北京へ旅した。国交回復してすぐに父母が訪れた時は、当時のまま残っていたという建物を見てみたい。現地を訪れて、住んでいた家を見ることによつて、何か思い出すことがあるのでは？というかすかな

期待があった。チャーターしたバスでその場所に着いた時、壊されたばかりの建物を前に、私の期待は見事に裏切られた。北京も天津も新しい町の建設に活気づいていた。観光客を呼ぶためのホテル建設があちこちで行われていた。レンガ造りの塀だけが残っていた家のすぐ近くにあった洋風料理店キスリングでは、当時の生演奏で洋楽を流していた。内地では到底口に入らないケーキやアイスクリームを売っていたと父から聞いていたが、店構えはおしゃれな当時のままで、『月餅』の専門店に代わっていた。ドイツ租界にあった映画館（光華劇場）で、ドイツ映画の『会議は踊る』・『未完成交響楽』や『望郷』・『ペルモコ』・『風と共に去りぬ』などの洋画を観たとの話。長谷川一夫・李香蘭（山口淑子）主演の『支那の夜』、『阿片戦争』を観たのは日本租界の映画館であったが、同時上映のニュース映画は、大本営発表、日本軍の勝利を伝えていたという。

私たちが訪れた旧ドイツ租界、月餅の店の向かいには驚いたことに、映画館がそのまま残っていて、今も映画が上映されているとのことだった。『電影院』の看板が上がっていた。

東大阪市（小阪・布施）映画館の思い出

河内小阪に撮影所があったことや大軌鉄道（現・近畿日本鉄道）に乗って、大阪市内に通うサラリーマンたちの住宅地として人口増加したことで、娯楽施設として映画館に人気が集まった。映画全盛期の一九五八（昭和三十三年）年には、布施市には二五館あったといひ、大阪市（二一九館）に次ぐ数だった。こどもの頃、小阪駅南側に南座、北側に小阪座と太陽座、二つの映画館があったのを覚えている。ひとつは邦画専門、もひとつが洋画だったか？映画好きの父に連れられて、休日には映画を観に行った。布施の映画館にもよく通ったが、覚えているのは、パール座・リオン座・アルス座などカタクナの名前だった。お正月には、大入り満員で、座る場所もなかった。ただ、映画の途中でも出入りすることができ、二本立て、三本立てなどで、今とは違って、映画館で過ごす時間は長かった。館内に店があつて、するめの焼いた臭いやタバコ、お酒の臭いがトイレの籠えた臭いに交じって、今のように空調もない時代、子どもにとっては、堪えがた



た。子どもにとっては、堪えがた

い時間もあつた。

子どもにとつてうれしいのはウォルト・ディズニーのアニメ映画。美しいカラーのファンタジックな物語の世界に楽しい夢がひろがった。『白雪姫』（一九三七）・『ピノキオ』・『ガリバー旅行記』・象の『ダンボ』そして『バンビ』。『ポパイ』・『パッタ君町に行く』は一九四〇〜四三年までの間にフライシャー兄弟によって制作された映画である。『負けられませんが、勝つまでは』と日本の子ども達が少国民として我慢を強いられている頃、アメリカでは、子ども達の夢を育むものとしてこんなに楽しい作品を制作していたのだ。小学校の時、先生に引率されて、布施の映画館まで歩いて行った。楽しい映画だけではなく、授業の一環として戦争映画も観に行った。一九五三（昭和二十八）年、日教組プロ制作、出演、岡田英次・月丘夢路・山田五十鈴、監督・関川秀雄の作品『ひろしま』には、多くの被爆者が出演した。原爆が投下されたヒロシマの姿が彼らによってリアルに再現され、大手の映画会社からは、反米的だという理由で上映が拒否された。悲惨な場面を直視できないで、顔を覆う生徒が多かった。一年前の夏休み、初めての旅行に父母が連れて行ったのは、広島。まだ、瓦礫が残っている町に、原爆資料館があつた。そこで見た光景は、一生忘れられない、ショックを受けたのは、銀行前の石段に残された人の影だつた。原爆投下から七年目のヒロシマに初めて出来た資料館を訪れていた私にとつて、『ひろしま』は、現実性を帯びて、強く心に刻まれた映画となつた。監督・新藤兼人、乙羽信子・宇野重吉出演『原爆の子』、『ひめゆりの塔』（公井正監督、津島恵子・香川京子・岡田英次出演）も学校から観に行った。戦争を描いた映画は、洋画にも名作がたくさんあつた。イタリヤネオレアリズモの代表作『自転車泥棒』（一九四八年、ヴ

イットリオ・デ・シーカ監督）は、子どもの時に観た映画の中で、最も心に残つた作品である。敗戦後のローマ。失業中の父親がやつとの思いで質屋から請け出した自転車でポスター張りの仕事についていたが、その自転車を乗り逃げされる。必死に幼い息子と自転車を探すが、見つからず、ふと、傍にあつた自転車を盗んでしまう。子どもの目の前で、警官に捕まってしまう父親。貧しい人々が必死に生きる姿と厳しく悲しい現実。『鉄道員』（一九五六年、ピエトロ・ジェルミ監督・主演）やギターやチャター演奏で有名な『禁じられた遊び』（一九五二年、フランス映画、ルネ・クレマン監督）、『第三の男』（一九四九年、監督キヤロル・リード、出演ジョセフ・コットン、オーソン・ウェルズ）の名画。

映画全盛の時代 いっぱい映画を観た

チャップリンの映画は人気があつて、映画館はいつも満員だつた。サイレント映画で字幕が読めなくてもよく分かつた。なんの映画だつたらうか？ 弁士がいて、音楽もあつて、紙芝居をみているように楽しかつたのを覚えている。『キッド』（一九二一年）、『黄金狂時代』（一九二五年）、『街の灯』（一九三二年）、大好きだつた『モダン・タイムス』（一九三六年）、『独裁者』（一九四〇年）など。日本でも大人気のチャップリンが初めて来日したのは、一九三二（昭和七年）年、五・一五事件の前日。戦前に三回、戦後は一度だけの来日だつた。

アメリカ映画が多く配給された。アメリカ南北戦争時代の『風と共に去りぬ』（一九三九年、Vフレミング監督、ヴィヴィアン・リー、クラーク・ゲーブル共演）、スペイン内戦の『誰がために鐘は鳴る』（一九四三年、ゲイリー・クーパー、イングリッド・バーグマン共演）。

西部劇もたくさん観た。一九三九年、ジョン・フォード監督、ジョン・ウエイン主演の『駅馬車』、一九五二年、ゲイリー・クーパー、グレース・ケリーの『真昼の決闘』。アラン・ラッド主演の『シェーン』は南北戦争後のアメリカ西部が舞台で、流れ者のシェーンと開拓農民の家族。ならず者との闘いの後、ひとり馬に乗って立ち去るシェーンと少年の別れ「シェーン、カムバック」の場面が心に残つた名作である。

邦画では、チャンバラ映画が子ども達に人気があつた。アラカンこと嵐寛寿郎の『鞍馬天狗』、杉作少年と天狗、正義の味方・鞍馬天狗のおじさんは、子ども達の英雄だつた。パンツマこと阪東妻三郎のチャンバラ立ち回りも人気があつたが、『無法松の一生』（一九四三年、稲垣浩監督）は、現代劇の名作である。正月映画は、『赤穂浪士（忠臣蔵）』が定番だつた。

黒澤明監督の名作『羅生門』（一九五〇年、三船敏郎・京マチ子・森雅之主演）、面白くて繰り返し観たのは、『七人の侍』（三船敏郎・志村喬・木村功・津島恵子）、志村の『生きる』も心に残る。その後、何度も観る機会があつて、世界のクロサワの素晴らしさは、子どもにも伝わつた。『晩春』（一九四九年）、『東京物語』など、静かな小津安二郎の映画を観て、原節子の美しさに驚いた。木下恵介の作品では、『カルメン故郷に帰る』（一九五一年、高峰秀子主演）、日本で初めてのカラー（天然色）映画が印象に残っている。

忘れた映画もあるが、数多くの映画を観た。女性に大人気のラジオドラマの映画化『君の名は』（一九五三年、岸恵子・佐田啓二出演）は、母に連れられて観た。今は新海誠監督のアニメーション映画として、同名の作品が若い人たちにヒットした。祖父と観た織田作之助原作『夫婦善哉』（豊田四郎監督、森繁久彌・淡島千景主演）。NHKラジオ大阪放送局で、一九五四年から

五百回放送された人気番組の映画化、『お父さんはお人好し』は、花菱アチャコ・浪花千枝子主演で、戦後、人々の生活も落ち着いてきて、満員の映画館には明るい笑い声があふれていた。

好きな映画スターは？

一九五〇年代、洋画には、素敵な俳優・女優、自分の好みのスターがあらわれてくる。

オードリー・ヘップバーン、グレゴリー・ペックの『ローマの休日』、『七年目の浮気』マリリン・モンロー。ヒッチコック作品では、『裏窓』のグレース・ケリー、ジェームズ・スチュアート。キム・ノヴァクの妖しい魅力『めまい』など。

エリア・カザン監督は多くの作品とスターを生み出した。『欲望という名の電車』（テネシー・ウィリアムズ原作、マーロン・ブランド、ヴィヴィアン・リー主演）観たのは小学生の頃で、難しくてよくわからなかったが、学生時代に原作を読んだ。マーロン・ブランドは好きな俳優で、『波止場』での演技が素晴らしい。後年、ヒットした『ゴッドファーザー』のドン・コルレオーネ役の老いた姿も印象に残る。次にエリア・カザンが見出したスターはジェームス・デイン。『エデンの東』（一九五五年、ジョン・スタインベック原作）で彼が演じる主人公キヤルの姿は、強烈な印象を与えた。続く作品、監督は異なるが、『理由なき反抗』も人気を博し、三作目の『ジャイアンツ』は遺作となった。彗星のように現れ、事故で早世したジェームス・デインは、映画の世界で永遠のスターとして、輝いている。

高校から大学に進むにつれて、映画を一緒に観るのは友人たち、映画館も大阪ミナミ、天王寺から京都へ

と代わっていった。

老舗の映画館、小阪国際劇場と小阪座は、二〇一〇（平成二十二年）年に閉館。東大阪の映画館は、一九九七年、リオン座跡地に建った布施ラインシネマだけとなった。しかし、コロナが流行し始めた二〇二〇年（令和二）二月末に、地元の人たちや映画ファンに惜しまれながら、ラインシネマも幕を閉じた。一年経ったいま、建物はなく、電車から見える映画館はすっかり姿を消してしまった。子ども時代に東大阪の映画館で観た映画は、それぞれが懐かしく今も心に残っている。

最後に、本稿掲載の「大江美智子 宝塚少女歌劇 三番叟」の写真は大阪商業大学石上敏教授より提供していただいたことを記して謝意を表す。

《参考文献》

『河内文化のおもちゃ箱』 二〇〇九年 批評社発行
水野正好監修 河内の郷土文化サークルセンター編集
『大阪「映画」事始め』 二〇一六年 彩流社発行 武部好伸著

『大阪春秋』NO. 一五三 二〇一四年 新風書房
『映画年鑑』一九五六〜一九五八年

（宮本順三記念館豆玩舎ZUNZO）